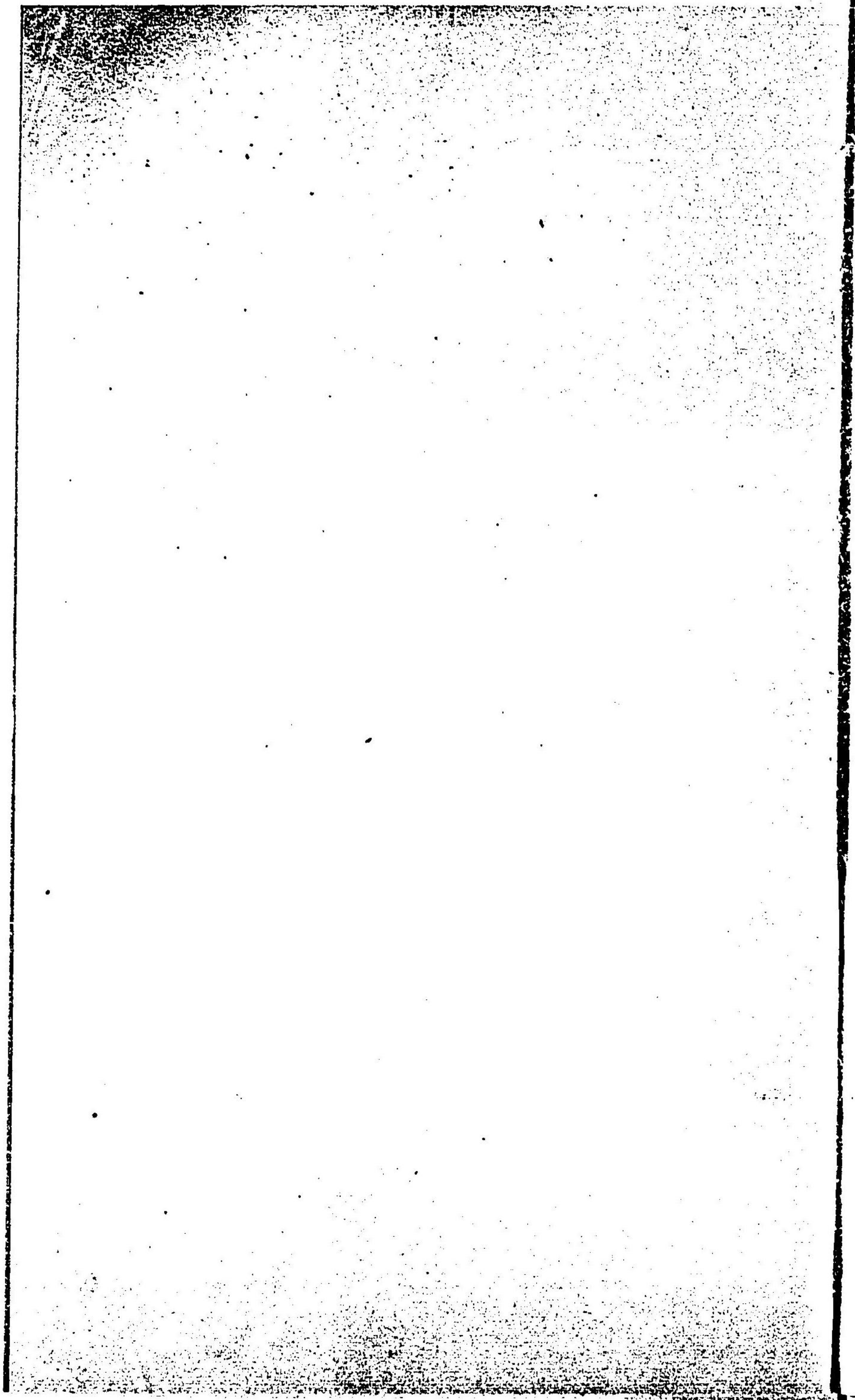


塔

影

南生塔川地

264  
321



目次

塔影	.....	一
契り草	.....	四七
誰袖橋	.....	七五
京女郎	.....	一一九
誰待鐘	.....	一四九
花紫	.....	一八九

特22  
218

曙あけぼのの  
姫ひめの御姿みすがた



明治  
43.9.17  
内交

羅衣纏ふ

瓔珞の

玉の黄金は

送りて

山吹の瀬に

裾裳捌く

誰をしも待つ

(三)

月の三室戸

姫佇立て

瀧津山瀬の

露水沫

濡れざらましこ

白銀しろがねを

朧おぼろる淡月あづき

仄ほめきは

御手みてに翳かげの

輪暈かむりがき

何處いづこ訪まづる

三

あ、日ひの姫ひめが

今日けふをしも

憧あこがれ暮くらし

宵月よぞきの

姫待ひめまちつ姫ひめが

談合かたごひを

聽きくは此この山やま

私語さごは

其その川波かわなみの

瀬せに騒さわぐ

葦間あしま吹ふく風かぜ

〔四〕

疇昔むかしを現いま在まに

偲しのぶ草ぐさ

山やまの靈魂こたまが

教唆せうそに

心狂こころぐるひの

水魄神すたまがみ

魔風誘惑ぬまかせをびさ

篠亂すしのみだ

猜疑の雨やそねみかみ

頽れ雲たふれぐも

文なき真闇あやまきま

[五]

濁りの水ににごりみづ

邪崇のよこしまの

叫喚の唸きさけびうな

漲りてみなぎ

滔々ささるの響ひびき



浮船うきふねの

島根しまね崩くづれて

聳立たかねだちの

影かげもあらじな

塔礎たきもとは

一ひと夜よに失うて

〔六〕

山やまの魔ま神がみは

嘲あざわら笑わりぬ

此こゝ河が限か劃りる

鳥獸とりけもの

影かげだに留とどめじ

川の魔は  
 打微笑ぬ  
 魚鱗の  
 敷を竭さめ  
 あさまこと  
 聖僧は泣きぬ

〔七〕  
 『喃月姫よ  
 繰溜めし  
 吳織の糸の  
 百條を  
 練りて凍れる

白銀しろがねに

彫きみて築きけ

塔頂いただきを

紫雲むらさきぐもに

礎いしづみを

疊たため川波かみなみ』

〔八〕

『さらば日の姫ひめ』

投げ懸かる

綾織あやおりの糸いとの

八千條やちせんじょうに

山やまいましめよ

此川の

魄も諭せよ

永久に

静けく靖く

授かれの

美妙き鎮

〔九〕

奇しき山靈を

慰籍の

靄の羅布

秋寂びて

纏ひけらしな

唐衣からぎを

色いろめきつ點綴づる

花葛はなかづら

撓たわみの小枝こえだ

葉傳はつたひの

露つゆの戦たたかぎ

〔10〕

妙たえなる水魄すいぼく

囁ささきて

秘ひむる心こころの

歡喜よろこを

狹霧せまぎりに罩こめし

綾帳あやまじり

ひきぞ隔へだての

さばれ波なみ

翼つばさを洗あらふ

翡翠かびせきの

呼よび交こふ聲こゑ

〔一一〕

姫ひめや櫂さきさす

浮うみ洲すの

烟けむる尾花おなばなに

招まねかれて

舟路ふねぢに仰あやぐ

瑠璃るりの空そら

雲くも叢むらだちの

天あま矛こは

聖みよ世よを鎮しづめて

秋あき津つ洲すの

國くにの守まも護り

〔三〕

守まも治りの川がは霧きり

むら消きて

十じゅう層そう三さん重じゆうの

玉たまの塔たか

正ただかに竣な功りぬ

礎柱いしむら

苔ぞ蒸すめりこけ

幾世こもいくよ

湛ゆる水はたみ

紺青のこんせい

曇らぬ鏡かみ

〔三三〕

緑紅みどりくわ

紫のむらさき

虹霓の浮橋にじ

駿騷うま

七夕なつた姫ひめが



雪に織り

雨に晒しの

五百機を

風に捌きて

打掛る

明星の寶冠

〔一四〕

玉の芙蓉に

黛の

匂ひ零れて

黒髪の

鬢亂す

天津風

霞の裾裳

陽炎の

袖も翻りて

樂の音は

御手より漏るゝ

〔一五〕

撥音激し

宇治の川

小絃ぞ私語く

淀の波

早瀬小車

伴つれて廻まふ

水みづ源みな遠とほし

鶯うぐいすの

竹たけ生をふ島しまや

四よの緒をの

琵琶ひばの湖うみ

〔二六〕

虚そ空らに在ある

七な姫ひめが

寶たから藏くら開ひらきて

赫か耀やきの

月つきの桂かつらの

花簪はなざし

星を連ねし

楷梯きざしを

龍の宮居りゆうのみやいに

訪問きんもんの

深き誓ちかきちかま

〔二七〕

千々の法燈ちののほとう

萬燈まんとうに

水は砕きて

不知火しじまの

散ては集まひ

淀みては

𪛗を畫く

此淵に

龍こそ潜め

夜を光す

珠をや秘めて

(二八)

鱗眞白き

蛇の

狂ふ玉簾

揺らく波

流は早し

柴舟の

水のまに

百八つの

川瀬の螢

むら立ちて

夜は燃るかも

〔二九〕

萬靈は宿る

三千基の

塔婆の小舟は

法の海

葦の葉隠れ

漕ぎ行けば

ほのく見ゆる

彼の岸に

彌咲き亂る

曼珠沙の

華の臺

〔二〇〕

下枝の露は

念珠つゝる

湿りの地の

苔衣

濡れ葉萍

定めなき

明日をも待たじ

束の間

風の戦ぎも

蟲の音も

法の御聲

〔三〕

姫が嘆ちし

山ながら

岩間樹梢に

群鳥の

空に懸れる



狩人の

絞る眞弓や

新月の

矢かげ怖れじ

放生の

翼は安し

〔三三〕

姫悲みし

川なれご

色も澄めり

此淵に

影さす月は

漁人さなびが

糸いとにも擬まふ

釣つりに

鱗うろこも動うごかじ

魚鱗うろこの

憩やすひの藻草もぐさ

〔三三〕

あ、姫ひめ在まさず

常世とこよしも

名残なごりの衣きぬを

秋あき染そめて

樂たのしみの音ね残ごりる

四の緒の

瀬々の調曲は

絶る間も

嵐ならまじ

歡喜の

寶塔聲あり

契り草

誰たれの情なさけを

契り草きりくさ

他あのの色香いろか

なくもがな、

黄金この花はなの

儂<sup>あはれ</sup>なき夢<sup>ゆめ</sup>を  
 手枕<sup>たまくら</sup>に、  
 袖<sup>そで</sup>かた敷<sup>しき</sup>の  
 假<sup>かり</sup>衾<sup>あふま</sup>  
 鐘<sup>かね</sup>に怨<sup>うらみ</sup>嗟<sup>あはれ</sup>の  
 數<sup>かず</sup>々<sup>かず</sup>も、

下露<sup>したる</sup>に、  
 濡<sup>ぬ</sup>れこそすめり  
 誰<sup>た</sup>が裾<sup>すそ</sup>、  
 眞<sup>ま</sup>白<sup>しろ</sup>き花<sup>はな</sup>の  
 移<sup>うつ</sup>香<sup>か</sup>を、  
 包<sup>か</sup>みやすなる  
 誰<sup>た</sup>が袖<sup>そで</sup>に。

多おほき人ひと目めに

つゝましの、

囁ささめく君きみが

忍しのび音ねを、

中なかに隔へだての

花はな籬まがき

戀こひの狭さ衣ころも

浪なみ華わ裊なほ

『を、それよ君きみ』

此こゝ花はなに

優やさしの姿すがた

偲しのぶかも』

『を、それよ君』

言ことばの葉はの

情なさけの露つゆは

小こ枝えだにも

清きよき雫しずく

宿やまるかも』

秋あきの八やち千ぢ種ぐさ

こりわきて、

床ゆかしの主ぬしの

名な頭がしらは、

を、此この花はなぞ

『菊きくの君きみ』

慕ふ此身は

美しの、

花辨にさる

接吻の、

許しを得たる

露子姫

雪の腕の

玉襷

しほり手折し

菊の枝に、

縁結びの

花環



露つゆが情なさけの

花はな筐かたみ

燃もゆる唇くちびる

觸ふれよ君きみ

解ほきな捨すてそ

契ちぎ草くさ

苔こけの衣ころもの

山やま清しみず水みづ

溪い間まを潜くぐる

いさゝ川がわ

流ながれの末すまは

夫それよ君きみ

戀しき門邊を

過るなる、

羨やむ水の

通路に、

いざ託てん

花環。

うら耻しく

咲く花に、

目をだも觸れそ

他し人、

戀しき主の

御手にこそ、

すくゑよ濡れし

契草、

環の花の

香に迷ひ、

飛な狂ひそ

浮かれ蝶。

花を誘ひの

水ならで、

手づから流す

白菊の、

花の筏の

行衛こそ、

やがては床し

彼の君の、

接吻をこそ

憧るれ、

あゝかひなしや

浮かれ蝶

萍ならぬ

花の香の、

波のうねく

濡れて咲く、

慕ひて焦れ

舞ふて戀ふ、

仇し心の

甲斐もなき

花には斗の

あるものを

飛な迷ひそ

孤れ蝶

色をもこむれ

移香の

花に主あり

流れには

只託て

浮くからに

瀬せにな散ちりこそ

花はな辨びらを、

渦うずにな解ときそ

花はな環たまき

誘さそ惑わで流ながせ

一ひとつ蝶てふ

蝶てふよ儂はかなき

浮うかれ蝶てふ

主ぬしある花はなを

慕したひても、

行ゆ方は遠とほし

山やま瀬せ水みづ

罩こむる狭霧さぎりや

山風やまかぜは、

花はなを隔へだて、

濡ぬれ翼つばさ

蝶ちょうと契ちぎりの

花はなならじ。

露つゆと縁えんを

契ちぎり草くさ

心こころは花はなに

身みは茲こゝに、

あるは現世うつしよ

幻まぼろしの、

やがて見みゑん

戀し君

姫が流せし

花の環こ

知ろして情

酌めよ君

妙なる御聲

憧がれの

花は床しき

君が手に

戀しき呼吸の

通ひなば



蘇生あまがへらまし

我魄わがたまは、

脱ぬけて出いらむ

我影わがかげは、

朧おろろに立たちて

君きみが傍へに。

假寝かりねに亂みだる

黒髮くろかみは、

手枕たまくらかせし

仇夢あだむを、

肌はだに纏まとひの

色衣いろころも、

艶なまめく紅べにの

血ちは燃もるて、

花はなに滾こほるゝ

露つゆの香かの、

『を、床ゆかし君きみ』

戀こひし君きみ』

誰ヶ袖橋

(一)

偲ぶ誰が袖

朽木橋

磯の笛家に

通ひ路の

柚人そまや狩人かりびと

山幸やまきちの

袖無衣そでなしころも

誰綴たれつづる

(三)

逢初あはれの川がは

鶺鴒かきいずの

翼つばさに越こしぬ

草くさの庵いほ

訪問かどづる海女あまは

脛曝はざきす

塩垂衣しほたれころも

誰たれか乾ほす

袖翳す主

柚人や知る

蘆の浦風

招かれの

藻塩焚く屋の

村烟り

(三)

佛白み

月朧

逢初の人

海女も知る

尾花細路

(四)

橋の畔の  
 花茨  
 縫りて綴る  
 碑は  
 猜の雨に  
 朽じもの  
 嫉の風も

夕映の  
 穂にも出めり  
 醒て憂き  
 秋の胡蝶の  
 夢淡き

(五)

消さじもの

(六)

その村時雨

吳織

山の彩糸

染めて織る

人は知らじな

我袖は

露そぼ濡れて

緋は褪せぬ

(七)

翻すは嵐

綾あやの裾すそ

九つ十九じゅう折を徑ぢやう

露つゆ繁しげき

戀こひのさ小衣こころも

肌はだ破やぶて

いらをつ男おとこの

艶つや色いろ失うせぬ

(八)

儂はかなき逢あふ瀬せ

悔くめごも

思おもひは絶たるじ

誘さそふごも

誘さそはるゝごも



情の言葉  
 忘れ得ぬ  
 嬉しき風よ  
 彼の人ご  
 袂もつれし  
 橋の上

浮草の  
 窠れ纏れて  
 花の咲く

九

君と逢初  
 語りてし

馴れし肌衣なれし かわ

牡丹花たんぼん

火は紅ひは べにに

我胸わがむねは

燃ゆるん思もひ

彼の人かのひとの

(10)

身をも焼やまし

手な觸ふれそ

(11)

焼やけよ迎むかへそ

捉とらえの

肌膚かわにも觸ふるめ

逢初の

崖に繁りの

藻隠れに

幾世添まじ

九十九髪

(二三)

相互に忍ぶ

蘆かげの

他に見る目の

かひなさに

袖のみ觸れよ

我肌は

人に許さじ

重裊かさねづま

(一三)

夫つまと約婚さだめの

仇男あだをに

添臥そひす肌はだの

血ちは冷ひゑて

骸せがれを脱ぬけし

魂たまはそれ

床ゆかしの君きみの

袖そでにこそ

(一四)

心こころならずも

木傳こづたひの

纏ちぢれは解とけぬ

姫ひめ薦すだの

柚ゆ人ま撃うつ斧きに

帶おび斷きれて

戀こひに簀すいれし

濡ぬ衣い

(一五)

許ゆるさじ添そはじ

我わが肌はだも

甲斐かひぞなからめ

現世うつしに

二途ふたぢかけし

夫と夫

重ね重ねし

色小袖

(一六)

許さじ心

夫や知る

添わじ肌を

君や見じ

怨まろゝ身の

よしなさを

愚くも悔む

川の名に

## (一七)

思をひは二たつ

うたかたの

身みを捨すてこそ

をハ夫それよ

浮うむ瀬せもあれ

醜みにく骸がら

彼かの君きみの胸むね

火ひは消きえむ

## (一八)

浮う名な立たつ波なみ

厭いとまじ

身みは汚けれじな

心澄む

逢初の君

進らせむ

筐の鼓

我ご見よ

(一九)

狂ひそよごて

我捨てき

じき君怨む

今何處

御姿在す

逢初の

名の戀しさに



水狂ふ

(三〇)

移香残る

誰が袖こ

問はじな獨り

手枕の

増穂の薄

寝亂れて

佛偲ぶ

かほよごり

(三一)

君私語か

風戦ぐ

汝が涙の

時雨降る

蘆村分けて

御姿の

葉隠れ衣

露の袖

(三三)

秋の七草

片敷て

打たふよ鼓

紫の

桔梗の調紐

裏表皮うらをもち

黄金こがねを盛もりし

女郎花をんながはな



下枝したえたわゝに

白銀しろがねの

栗くり真ま萩はぎに

散ちり残のこる

筐かたみに悲かなし

撫子なでこの

色いろや情なさけの

緋ひの紙かみ紗さ

(二四)

誘まよの曲調しらべ

淵ふちに瀨せに

狹霧さきりの帳とばり

かゝげ來きて

八重やえの葎むらの

草影くさかげに

君在きみす音ねか

きりはたり

(二五)

音ねに幻まぼろしの

佛ほとけや

誰たれご見みるらむ

其人そのひとの

葛くわの葉衣はころも

藤袴ふじはかま

そよぐ尾花おなの

亂みだれ髪がみ

(二六)

水みづに舞まふ袖そで

浮草うきくさの

雫しずくは君きみが

涙なみだかも

身みは濡ぬれさぎの

羽ははやれて

狂くるひの姿すがた

耻づかしき

(二七)

寄添るば

月隠れ

影底暗み

仇瀬波

情なき心

詫て泣く

君松虫の

聲許り

(二八)

葭束の間も

懐しの

君憧るゝ

秋更けて

蟬果な

白露の

乾る間待じな

身は消ゆる

(三九)

亂れの鼓

狂舞ふ

姿幻

秋の野の

戀の八千種

身に飾る

袂たもとに引ひかれ

誘さそれて

(三〇)

淀よどみの淵ふちに

逢あ初の

瀬せには怨うらみの

波なみ騒さわぐ

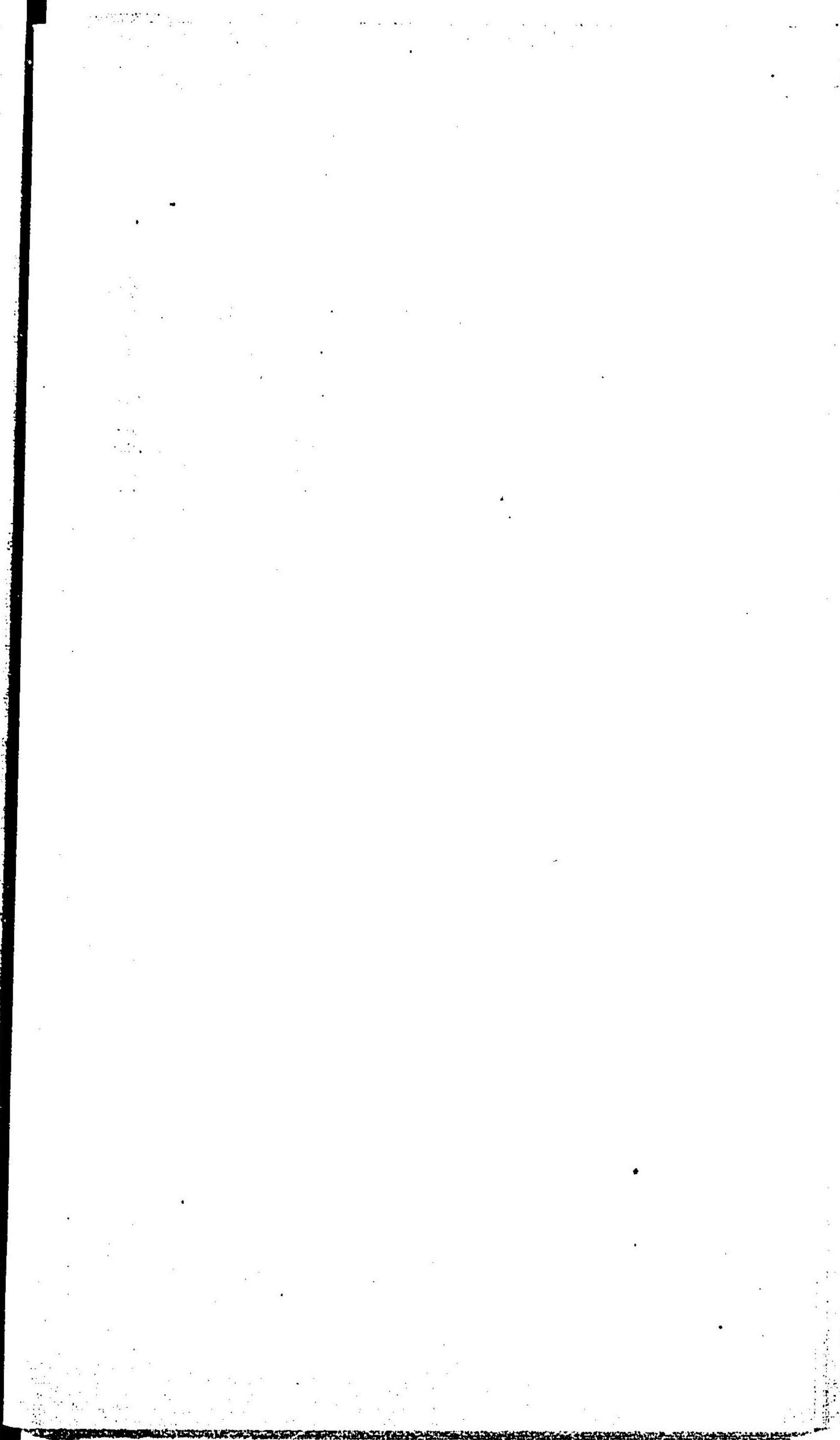
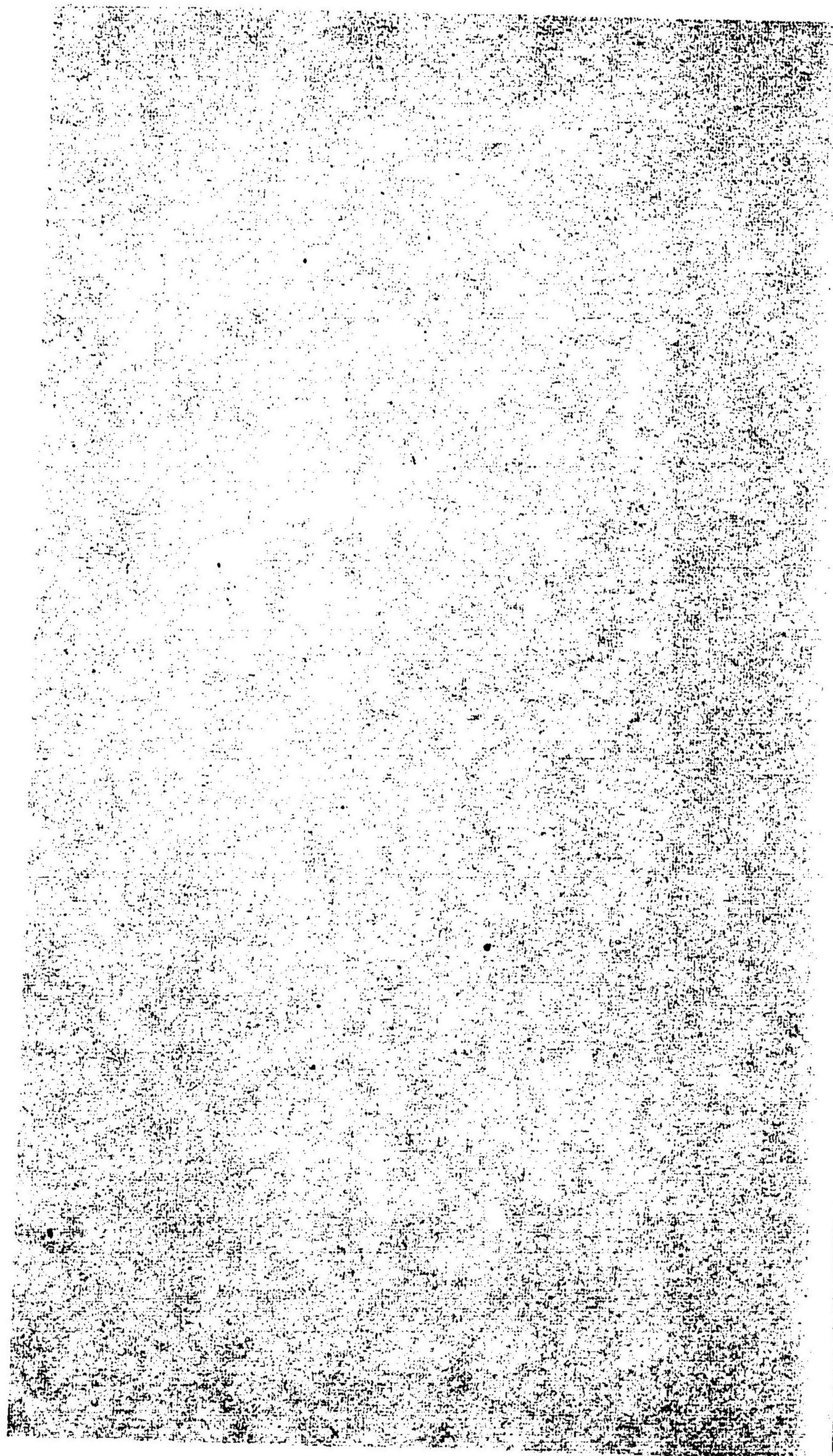
誰たが袖そでの橋はし

行ゆき逢あひの

杣そま人は謠うたひ

海うみ女めは舞まふ





京  
女  
郎

〔二〕

夢路は淡し、

仇し野の、

花をや簪し、

一夜妻。

引眉うるみ、

ほの白き、

夕邊の芙蓉。

朝露に、

頬紅溶けて、

艶照りの、

野茨薔薇匂ふ、

唇の。

香にこそ酔はめ。

を、京女郎。

〔三〕

風咽び泣く、

浅茅原。

垂帳さばりに秘ひめし、

綾褥あやざすま

幻消まほうしきるぬ、

かげろふの、

儂ほろなき燻くもり、

伽羅きんの香かも、

露つゆうら涸野かたの、

花菱はなしんり、

浮うかれ男蝶をとの、

醜骸しひがい

算あこそ亂みだせ、

を、東男あづまをと

〔三〕

通の關路

忍ぶ草

草摺衣

裾破れぬ

手折を欲しき

衣手は

濡れぞまさらめ

戀草の

露に憧れ

寄り添ふば

靡き退きぬる

女郎花

風にや迂曲る

を、京女郎

秋たけぬらし、

移ひの、

花羞耻の、

袖翳す、

儂な姿

なまなかに、

〔四〕

うつしな採りそ、

野に棄て、

ひく人煩らし、

郎姫、

契捨つるも、

怨えじな。

戀は憂きもの。

を、東男

(五)

浮かむ瀬もなし、

濁りゑに、

虚偽多き、

醜花の、

水莖茂る。

『待つ間憂し、

今宵來ませよ、

朗君、』

誘ひの流れ、

根無し草、

花はうきすの、

藻屑にも

縫りて咲くを

を、京女郎

〔六〕

ひきそよ袂

薄紙衣

我胸焦る

螢火の

千々に亂るれ

寝さめ髪

姿艶めく

菊襲衣

汝が情なきに



彌増の、

切な心

血潮沸く。

盡せぬ怨み。

を、東男。

〔七〕

執念は寄る邊

片男波、

濱の眞砂地、

濡れ襦、

妹脊の貝の、

名もあるに。

「情なき君よ、

他し男こ、

契りを籠むる、

戀衣の、

夫しあるか』こ

反問の、

心もそゞろ。

を、京女郎

〔八〕

「鴛鴦の雌雄の

濡れ翼、

忍び夫さる、

なきものを、

焼野雉子の、

子も持たぬ、』

まごろむ夢に

秋たけて、

風吹き萎る、

女郎花、

一人寝る夜の、

手枕ぞ。

心はやすし。

を、東男。

〔九〕

捨つも憂かりき、

捨てられて、

彌惜まれぬ。

仇花を、

手折らまじもの、

浮かれ男の、

あゝ盡きじ世に。

袖ふりて、

捨てられき我、

汝を捨てめ、

沖の小島の、

離れ岩、

仇浪高し。

を、京女郎。

[10]

朽木の舟、

囚れの、

花の倂なま

汐たれぬ。

海女の荇藻の、

亂髪みだれがみ

怨に迂ねる、

蛇の、

艦綱纏ひて、

狂ひ這ふ、

潮咽びぬ、

沖千鳥

血に啼きて、

を、東男

〔二〕

沙路の夕陽

紫の

波より暮れぬ

漁火の

影か不知火

燃ゆる胸

離れ小島に

舟招く

枯れ穂の薄

啜り泣く

捨てられ草の

女郎花

思ひしるかも

を、京女郎。

〔三〕

漕ぎ離れぬる、

朽木舟。

叫號はきゝぬ。

『憂き人よ、

怨みに亂る、

黒髪は、

蓬に繁る、

玉藻草、

纏ひ纏ひて、

舟やらじ』

潮搔き騒ぎ、

渦搖らぐ。

藻草の繁り。

を、東男。

〔三三〕

戦ぎの藻草、

舟を逐ふ、

あゝ身の果、

うたかたの、

怨みは消るぬ。

『玉藻こそ、

情なき君の、

亂れ髪、

纏ふは戀の



小夜衣』

人影消ゑて、

月白み。

黒き朽舟。

を、東男。

誰待鐘

〔一の〕

眞菅ますげの小笠をかさ

破やれぬれば

雨あめそぼ浸ひたる

濡ぬれ髪かみに

櫛も通はじ

結ぼれの

胸の綾絲

を、誰偲ふ

浅茅道

涙時雨るゝ

[1011]

草なひ鞋

紐朽ちて

傷めの戦ぎ

萱髑る

袖牽く茨

肌膚裂けて

鮮血彩る

を、誰をかも

憧れの

風の咽び

二三

[153]

緋の杖は

新月の

撓みの眞弓

木隠れの

白衣びやくしほれて

鈴かの音ねの

袖そでに振ふるふ

をく誰たれごしも

白露しらつゆの

乾かわぬ間まの情なさけ

[155]

雨あめを厭いとひの

笠かさならば

紐ひもや解とかまじ

風かぜ吹ふかば

翳しの袖に

人目せく

褪せし口紅

を、誰慕ふ

手枕の

旅の寝れ

【一の五】

辻建つ葉

文字荒撫で

壊れの祠

神在さず

囁く落葉

誘惑ふ魔の

迷ひの小路

を、誰ぞ来ませ

行暮て

問わま欲し道

〔一の六〕

傾け笠の

片びさし

月もさゝじな

夕顔の

白む面影しろむおもかげ

病葉のやまは

翻りて視かたむく

を、誰たれにだも

忍ぶれしのぶご

色いろに灰ほめく

【二の七】

いぶせき裾裳すそも

土つちの香かに

色いろも栗くりも

粗布あらぬいを



卯の花垣こ

蝶よ見て

頼むは指道

をく誰そや住む

私語の

算滴垂る

\*

\*

\*

[1161]

蜘蛛の糸

落椎の

念珠懸け綴る

癡寺に

鐘かねの樓たか

傾かたむきて

鬼おに薦すす攀よづる

をを誰たれを待まつ

時ときの鐘かね

御み堂だう守し撞つく

崩くづれの岩いわ根ね

爪つま立たちて

萍ふき繁さしみ

濁にご水みづ

〔三の二〕

うつろふ姿すがた

肉塊にくくわいの

血ち煮にるで狂くるふ

をを誰たれぞぞここも

知しらじもの 慕たひて泣なく

[III]

惱なみに寝ねる

たそがれの

鐘かねや怨うらみ

撞つかじこも

遣る瀬は有らじ

撞かばやな

竭せじ涙

を誰をしぞ

怨み詫び

響は濡める

[四の四]

忘れ難なや

姫百合の

月映す面

袖白み

音をこそ仰げ

夕霽に

乙女佇む

をく誰が袂

燻り香の

薔薇の戦ぎ

〔二の五〕

朽木の柱

瘦せ細そる

腕に抱きて

遠郷を

眺望てうぼうむ名残なごりや

床ゆかし人ひと

蓬よもぎふ瀬せの頼たのみ

をを誰たれ怨うらむ

憂うれき鐘かねの

送おくりき行ゆ衛ゑ

【二の六】

憂うれきは曉あけぼの

仇あだに撞つかじ

亂心みだりこころに

屈指かぢなびて

夕暮六つの

鐘をのみ

里へこ送る

をく誰が耳に

通ること

撞木に絶る

【二の七】

法衣纏ひの

火車に

呪詛の唸き

念珠断れて

あゝ胸焦る

血の池に

墜ちてぞ消さむ

をく誰も無き

山寺の

鐘は響かじ

\*

\*

\*

【三〇一】

「君いゝさずや

語らひも

山梔の花

根や朽ちし



妾來ぬるに

戀こくば

なご鐘撞かぬ』

をく誰沈む

池水に

冷たき永眠

情け白露

いふ花の

朝も待たじ

笠脱ぎて

【III】

背後うなじ仰あやげば

鐘かね黒くろみ

宵よ月づき淡あかし

をを誰たが姿すがた

待まちち詫わて

靈たま火び燃いゆる

【三の三】

罪つみの深み池いけの

測はかり得えじ

杖つゑこそ捨すてめ

渦うず廻まる

血潮ちしほの淀みよどみ

浮うび葉はの

臺うたな破やれぬる

をを誰たが骸げ

絡から捲まきて

繁しげる水みづ草くさ

「靈みたま在まさば

幻まほろしを

罩こめよ狹さ霧きりの

むら立たてば

【四の三】

懐かしものを

なご鳴らぬ

思ひ出の鐘』

をく誰住まじ

癡寺に

招きの薄

【三の五】

聲のみ明瞭

茅蝸は

彼の人叫ぶ

咽びの音